入　賞

豊かに暮せる福島を目指して

川越市立東中学校・3年　中野（ナカノ）　晶藍（セイラ）

この一年、私達の生活は、コロナウィルスにより大きく変わってしまいました。あたり前に出来ていたことが出来なくなってしまった今、私はふと十年前の東日本大震災を思い出します。

震災の時、私はまだ幼稚園生でしたが、あの時のことは今でもはっきりと思い出せます。放射線のため、毎日遊んでいた公園に行けなくなり、楽しみにしていたどんぐり拾いやいも掘りも中止になってしまいました。子供心につらいこともありましたが、私達の地域は計画的な除染のおかげで比較的早く日常を取り戻すことができました。

五年後、私は仙台に引越すことになりました。仙台に行く途中、車で福島の帰還困難区域を通り、初めて被災地の現状を目の当たりにしました。壊れたまま残っている家屋や放射性物質の仮置場が並んでいる様子は原発事故からの復興の大変さを物語っていました。しかし、その景色から私が見たのは生でした。汚染されているといわれる大地は緑に覆われ、生命力で満ちあふれている様に見えました。

あの日からさらに五年が経ちました。現在でも福島では原子力災害の復興に向け、環境再生の取組が進められ、「原子力災害の福島」から「豊かに暮らせる福島」へ未来に向けてのチャレンジが進んでいるのです。

では、どのような町づくりをしたら良いのでしょうか。

私は、福島の魅力の一つである自然の豊かさを生かすために、再生可能エネルギーを上手に活用して、人にも自然にも優しい町づくりを提案します。例えば、新しく建物を建てる際、ソーラーパネルの設置を義務付けたり、帰還困難区域や放射性物質の処分場等にソーラーパネルや風車を設置し、大規模な発電施設を作ることで安定したエネルギーの供給を実現する。また、避難した住民の帰還だけではなく、コロナ自粛下の新しい働き方として定着した「テレワーク」で都市部からの移住を検討している人や老後をゆっくりと過したい人など、様々な人に住み易いと思ってもらうために、バリアフリーの徹底、防災も兼ねた公園の設置、学校、保育施設、医療施設、道路整備等のインフラ事業を行うだけでなく、さらに発展的な町づくりとして、自然を残す地域と居住地域に分けたり、高齢者と若者が助け合えるコミュニティができるようなシステムを行政が作ったら良いと思います。また、町の魅力を伝えるため、移住を検討している人がお試しで生活できるような施設や、温泉やキャンプ場のような娯楽施設も必要だと思います。たくさんの人が来れば、その魅力は、SNSなどによって拡散され、それを見て福島に来る人も増えると思います。

やはり、便利で住み易く、おしゃれな町には多くの人々が心をひかれると思います。そんな町を作るため、色々な人からアイデアを集め固定概念に囚われないすてきな町ができるといいなと思います。